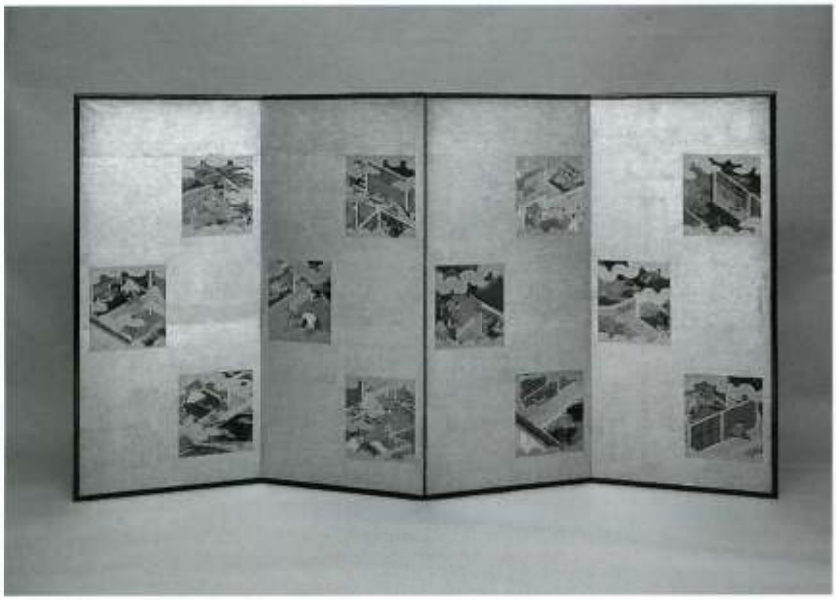
源氏物語の意匠

宗教的な教義や説話以外の、純粋に文学的な主題を意匠化した模様は、日本の工芸意匠の一つの大きな特徴ということができます。しかし文学的な意匠が、工芸品の上に確認されるようになるのは桃山時代からであり、特にその中でも『源氏物語』が主題とされるようになったのは、江戸時代のことと考えられます。

現代の着物の原形であり、近世初期から身分や男女の別なく用いられた小袖は、江戸時代には特に女性の衣服において意匠面での華やかな展開を見せましたが、そうした中で大きな部分を占めたのが文学的意匠であり、その代表格が『源氏物語』を意匠化した模様なのです。

『源氏物語』を主題とする意匠は、江戸時代から明治時代にかけて特に染織品において多様な展開を見せたほか、漆工品やその他の工芸品にもしばしば見られます。『源氏物語』の意匠化の背景には、優れた文学としての『源氏物語』があることはいうまでもありませんが、これを千年にわたって愛してきた日本人の心も忘れてはなりません。

今回の展示では、様々な形で『源氏物語』を意匠化した工芸品を展示するとともに、その原点ともいうべき「源氏物語絵巻」や王朝服飾に関わる資料も合わせ展示いたします。



源氏物語貼交屏風
江戸時代・18—19世紀

薄茶精好地源氏香模様振袖
明治時代・19世紀

紺麻地紅葉賀模様祝着
江戸時代・18—19世紀